

0期 田村 昭夫

恒例の春の小屋酒場からの帰路、長岡の長女の処に寄ってから、鈍行列車に乗り継ぎ、小出経由で会津若松に帰ってきた。

新車両二台。前の車両には私を含めて五人、後の車両には閉経集団が十二、三人。やがて前の車両は私一人の貸切となった。

窓の外は深緑と残雪の風景。贅沢とはこのことを云う。年金生活者の一人旅には理想的設定である。ここに最愛の夫に先立たれた傷心の一人旅の美しい女（ひと）が乗り込んでくれば天国である…。

しかし、現実には苛酷である。どやどや乗り込んできたのは、茶髪、顔黒の痴呆高校生達。彼らの品性の下劣さときたら表現の域を越えている。彼らの先生と思しき二人が「年々生徒の質が低下してきますね」と話していた。

日本は減じた。日本を減じたのは誰か。男達である。大切な吾子の教育を、愚かなカミさんと、低能な学校の先公にまかせた男達に責任がある。

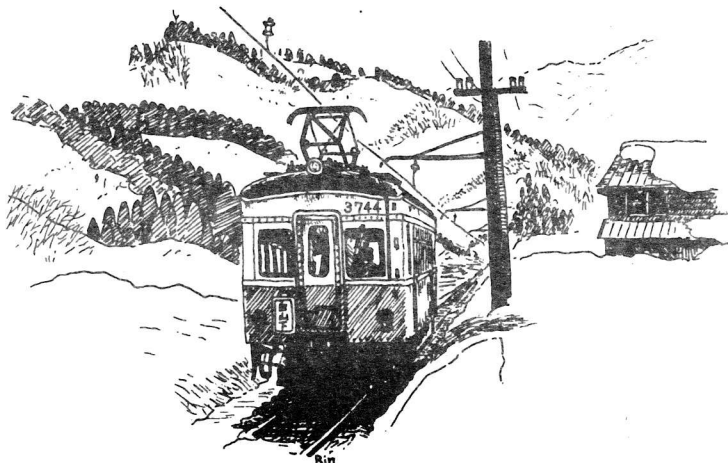
女が稼ぎ、男がヒモとして家にあり、子供の簇教育をするのが本来あるべき姿である。一億総サラリーマン化した昭和十年代に、今日の滅亡した社会の萌芽を見る。

拝啓

先日は大変お世話様になりました。山に居る時だけが、幸せな気分になれます。ベルクハイムの下にテントを張っていた「コビキ塗装」の社長との語らいが今回の収穫の一つでした。

別紙原稿の文章で「低能な先公」は「低脳な先公」のあやまりです。お詫びして訂正させていただきます。

白山南竜でお会いできるのが楽しみです。それまで左ヒザを直しておきます。 敬具



0期 田村 昭夫

（工学部の同窓会誌に投稿したものに、改善を加えたものです。）

北陸地方の大学は州立一校で充分である。国立や私立大学はもはや不用である。

北陸州立大学の本部を金沢に置き、医学部、文学部、理学部は金沢大が引き継ぐ。薬学部、経済学部は富山大が引き継ぐ（※1）。工学部、法学部を福井大が引き継ぐ（※2）。教育学部は各県立とする。各地域の伝統と特色を生かすとこの様な配分になるが、如何なものか。

現在進行中である角間地区への工学部、薬学部の移転を中止して、前者を福井へ、後者を富山へ移す。北陸先端技術大学院大学は現在の辰ノ口で国立のままで良い。又学生数は今の半分で良い。そして、社会人を受け入れる開かれた大学にする。

大学人は角間に籠らず、香林坊に出没すべし。公開講座は片町、香林坊で行う。少子化がさらに進み、生涯教育が叫ばれる昨今、教育改革は急がねばなるまい。

古来金沢は天下の書府として世間に広く知られてきた。日本の教育改革は金沢から起きて当然である。

以上が私案であるが、これを叩き台として、議論の輪が広がれば幸甚である。

※1 富山に薬学と経済学を置く理由…古来越中は売薬を通して情報収集と蓄財の才にたける。

※2 福井に工学と法学を置く理由…古来、越前は織物工業の盛んな地であり、明治憲法の元となった「五ヶ条の誓文」の草案を作ったのが、越前藩士由利公正である。

付記）私大、短大を一般教養部に改組。

一般教養部の復活（志望学生全員入学）

金沢美工大を芸術学部へ改組する。

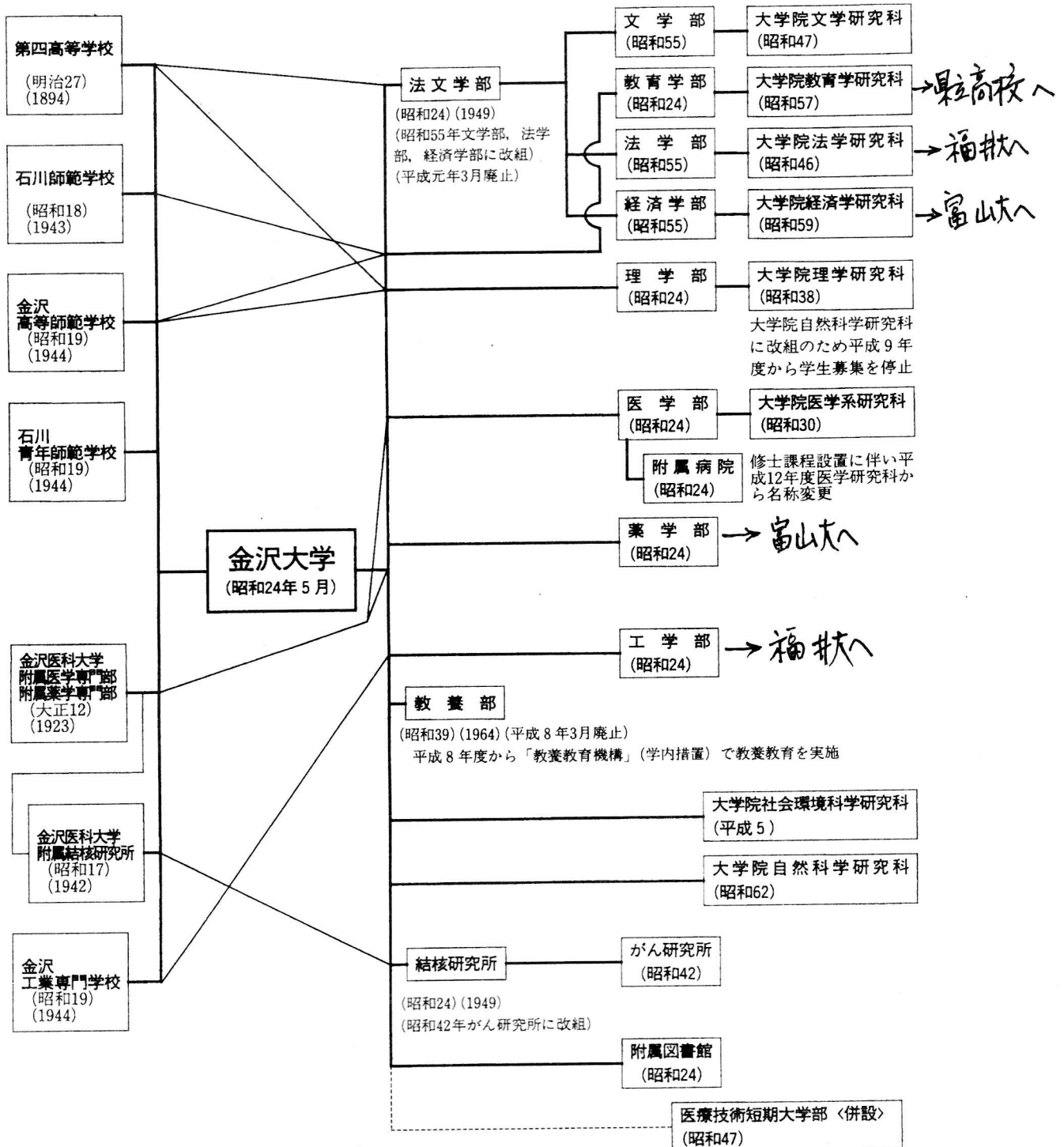
一般学生は全寮制とする。

社会人は専門学部へ入学さす。

北陸州立大学(案) (全員入学・全寮制)

I 大学の概要

1. 沿革



金沢大学歴代学長一覧			(在任期間)
初代	戸田正三		(1949.9.22~1961.9.21)
第2代	石橋雅義		(1961.9.22~1967.9.21)
第3代	中川善之助		(1967.9.22~1973.9.21)
第4代	豊田文		(1973.9.22~1979.9.21)
第5代	金子曾政		(1979.9.22~1985.9.21)
第6代	本陣良平		(1985.9.22~1989.9.21)
第7代	青野茂行		(1989.9.22~1993.9.21)
第8代	岡田晃		(1993.9.22~1999.9.21)
第9代	林勇二郎		(1999.9.22~)

第10代 田村昭夫

市立
金沢芸術工科大学 → 芸術学部
学生は全寮制とする

一般教養部の復活 (北陸地方の全大学
に全学生を無試験入学
させる。専攻への特性を現る
ため)

金大WV同楽会 人材派遣

3期の西尾氏は小松製作所（現在コマツ）を退職後、コンサルタント業で多忙である由。毎日を如何に過ごすかで腐心する私にとっては、誠にうらやましい限りである。

そこで提案したい。各界のエキスパートを擁する金大WV同楽会は非営利団体（NPO）として名乗り出る。同楽会員は全員、各自の得意とする分野をワングルホームページに載せる。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の様に、困っている人達がいたら、世界中何処でもすぐに飛んで行く、お助け鳥集団。

私の例で恐縮であるが…。

田村 昭夫 1936年8月28日生まれ

（専門） プラスチック成形加工

（趣味） 山野彷徨 宇宙論

（運転免許） なし

（パソコン操作） 不可

（連絡先） 〒965-0031

会津若松市相生町4-15

TEL FAX 0242-22-0506

この国を滅亡さすもの

0期 田村 昭夫

先日、地元会津大学で、世界各国から来ている外人教授達による「わが母国の教育について」のパネルディスカッションが行われた。

各国共通なのは、「子供の仕付けは父親の役割」であること。翻って、日本の仕付け役は母親。

「わかった！」会津藩の掟にある、「婦女子の言は聞くべからず」の真意がやっと解った。

思春期の男の子の心身に荒れすさぶ嵐を、母親は絶対にわからない。それがわかるのは、嵐の経験者である父親だけである。息子が一人前になるとうとする最も大切な時、単身赴任とやらで父親が家を離れたらどうなるか、云わずもがなである。又、例え家に居たにしても、働き蜂に成り下がって、息子との対話が無く、PTAは母親任せでは、父親失格である。

しかり。この国を亡ぼすのは、サラリーマン親父である。仕事仕事と云って会社イノチで生きてきても、会社では忠誠心だけである。無能な高給取りはもはや不用なのである。

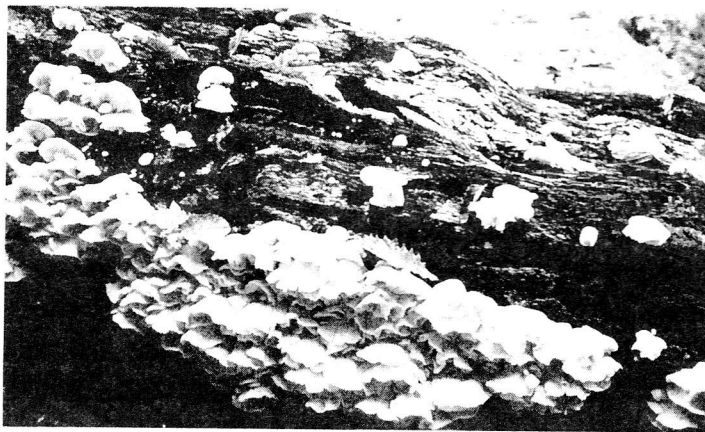
サラリーマン諸君！もういいから大切な家庭に帰ってくれ！そして貧しくてもいいから自立した姿を家族や息子に見せてやっていただきたい。





p. 89～92は、「自然人」（橋本確文堂）NO. 51、2000年4月1日号の
転載です。p. 92からお読み下さい。

筆者 梅 典雅は19期OB



ブナの枯木に生えるブナハリタケ。「かのした」などの方言で呼ばれる

葉広葉樹のダケカンバ、高山帯では同様に
ハイマツやミヤマハンノキなどであるが、
これらはいずれも菌根菌を伴う樹種であ
る。
高山帯におけるキノコ調査は、全国的に
もほとんど例がなく、本県でもまだ、緒に
付いたばかりであるが、この地帯では菌根
菌の割合が高いことが分かってきた（表
1）。また、高山帯に特有と思われるハク
サンアカネハツ（仮称）やイロガワリキイ
ロハツ（仮称）、北欧に生育するとされる
アカキヒダタケ（仮称）といった新（産）



熱帯性とされるオオシロカラカサタケ（撮影／山下良明）

種が多く見つかっている。反面、山地帯の
キタゴヨウから高山帯のハイマツまで、い
わゆる五葉松と共生するゴヨウイグチやベ
ニハナイグチ、平地から広く分布するヌメ
リイグチなども確認されている。
一般に、標高が高くなるほど土壌の栄養
分は乏しく、温度や水分の条件からも植物
の生育には厳しい環境と言える。そういう
場所に生育する樹木にとっては、菌根菌の
働きはより大きなものがあり、菌根菌は壊
れやすい高山帯の生態系を地下で支える力
持ちと言えよう。

兼六園とキノコたち

兼六園にキノコは似合わないかもしれ
ないが、実は関係おありなのであ
る。同園の庭師であった故南多喜男氏
の努力によるものであるが、園内で見
つかったキノコは二百二十六種類にお
よび、中にはケンロクエンクギタケ（仮
称）やブドウヤマドリタケ（仮称）、ク
ロアザキヒダタケ（仮称）などの新種
も含まれる。また、同園が国内有数の
冬虫夏草類（p. 19）の宝庫であること
も明らかになった。

なぜ兼六園にキノコが多いのか？
ひとつは、シイやカシなど元々そこに
あった樹木に加えて、松や桜など様々
な樹木を移植し、池水や築山など多様
な環境が創られたこと。もうひとつ
は、落ち葉掃きなどの管理が常になさ
れ、菌根菌の生育に適した環境が保た
れていることである。

中にはサルノコシカケ類やマツオウ
ジなど、生きている老木にも発生し、
その死期を早めてしまう厄介者もいる
が、大半のキノコは天下の名園の維持
に役立っていると考えられる。

時にはキノコの視点で兼六園を散策
するのも一興であろう。その際『兼六
園とキノコたち』（p. 29）は最適なガイ
ドブックになる。

林の衰退→マツクイムシ等の被害といったように、人と樹木とキノコの間には密接な関係がある。

もうひとつの変化は、熱帯性のキノコの進出である。近年、カキノミタケ(94)、イカタケ(94)、ヤコウタケ(95)、オオシロカラサタケ(98)、ダイダイガサ(92、99)といった南方系のキノコが相次いで発見されている。その原因として、熱帯地方から輸入する観葉植物やパーク堆肥などに菌が混ざってくることも挙げられる。このことは、熱帯性のものに限らず、南半球の固有種などもやってくる可能性を示唆している。

そして、地球温暖化の問題がある。環境庁は温暖化の指標と考えられる生物のひとつとしてオオシロカラサタケを挙げており、数年前に同庁が発行したパンフレットには、関西地方まで北進したことが記載されている。これらのキノコの移動は、直接的には人為によるところが大きいとしても、北進していることはほぼ間違いない、今後は本県で定着、増加するのだろうか、観察が必要である。

キノコの宝庫 山地帯

標高五〇〇mを超えると、雑木林の主要な樹種もコナラからミズナラに替わるころが多く、ブナも見られるようになる。石川県における本来の山地帯(ブナクラス域)は、ブナ帯とも呼ばれていて、もう少し

し低い標高から一六〇〇mあたりまでとされるが、ここでは、主にミズナラ林とブナ林のキノコについて述べることにする。

ブナに生える代表的なキノコといえば、ナメコやブナハリタケ(かのした)、ムキタケなどがあり、ミズナラに生えるものにはマイタケやクリタケ(もたせ)などがある。これらは山村の人たちが昔から採っている美味なきのこで、いずれも腐生菌(木材腐朽菌・p17)であり、老齢木や風、雪崩による倒木が広く存在する地域では、まとまって生える優秀な食菌のみを採取対象とするのは当然であろう。そのほか菌根菌では、ブナヌメリガサやアケボノサクランメジなどがブナ林に特有の種とされる。

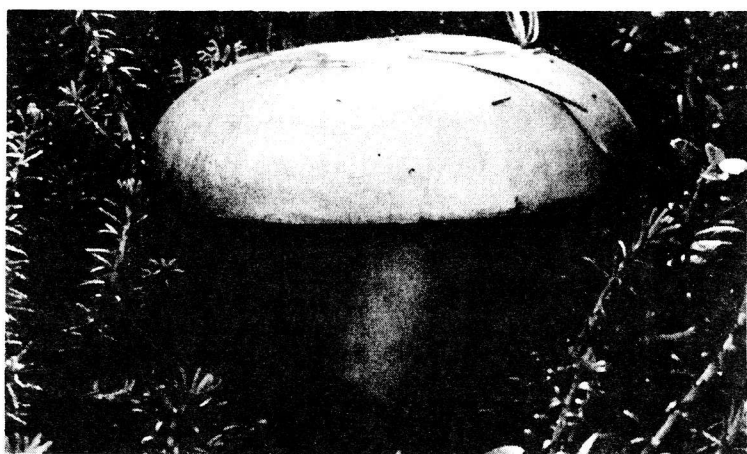
しかし、この地域で確認された種類の多くは、実は、里山地帯と共通である。例えば、南方系とされるヒメベニテングタケやムラサキヤマドリタケが、冷温帯気候のブナ林からも採取されている。里山本来の樹種であるシイやカシ、雑木林の主要樹種であるコナラやアベマキなどとミズナラやブナは同じブナ科の樹木であることから、キノコの分布も連続すると考えられるが、まだ、分からないことも多い。

なお、環境庁の『植物版レッドリスト』(一九九七)に記載されたキノコ類のうち、本県ではムカシオオミダレタケ、エビタケ、タマチヨレイタケ(以上、絶滅危惧Ⅰ類)とツキヨタケ(絶滅危惧Ⅱ類)の四種

が確認されている。前三種はともかく、ツキヨタケはごく普通に見られるものであり、この選定には疑問がある。しかし、これらは、自然性の高いブナ林に発生するものであることから、全国的に良好なブナ林が減少していることを勘案したものであろう。

菌根菌の威力? 亜高山帯・高山帯

石川県では、標高一六〇〇mから二四〇〇mあたりまでを亜高山帯、それより上部を高山帯としている。代表的な樹木は、亜高山帯では常緑針葉樹のオオシラビソや落



白山の高山帯で発見されたイロガワリキイロハツ(仮称)



多彩なキノコ 丘陵帯

海岸から概ね標高五〇〇メートルまでの、いわゆる里山と呼ばれる丘陵帯を中心としたこの地域は、古くから人間の様々な活動により、自然環境の変化が著しいところである。元々の植生は、スタジイやタブノキ、カシ類などの常緑広葉樹が生える照葉樹林帯（ヤブツバキクラス域）が広く占めていたが、現在は社寺林などにわずかに残るだけで、平地の大部分は都市や農地に改変され、里山地域もスギなどの植林地やマツ林、雑木林と呼ばれる落葉広葉樹の二次林



ヌメリササタケ。県内では「すべたけ」「むらさきのめり」の方言で親しまれている

になっているところが多い。

しかし、人の手が入った雑木林や樹木の多い公園などは、菌根菌（p16）にとつては、むしろ生育に適した環境となる。そのため、身近な林では昔からきのこ狩りが盛んで、アカマツ林でのマツタケやアマタケ（しばたけ）をはじめ、海岸クロマツ林でのシヨウロやシモコシ、コナラなどの雑木林でのサクラシメジ（かっぱ）やヌメリササタケなど、おなじみのきのこが並ぶ。

このように、人為の影響を受けた多様な環境を反映して、この地域のキノコ相も多彩であり、種類数は全体の八割以上におよぶことが表1から読みとれる。

また、人為的作用と自然の遷移（復元）

による影響を受けて、キノコ相の変化も他の地域に比べて大きい。そのひとつは、里山の変貌である。燃料革命以来、里山の雑木林は放置か、開発か、植林かのいずれかであったといってもよい。燃料としての薪や炭、肥料としての落ち葉などが採集されなくなった雑木林は、常緑樹も茂る暗い林になり、土壌は富栄養化してくる。このような変化は、マツタケ生産量の激減に象徴されるように、菌根菌の種類の变化と減少、腐生菌の増加をもたらす（表2）。つまり、この地域におけるきのこ狩りの対象種の多くが菌根菌であることと、その生育環境が人為により維持されてきたことは決して無縁ではなく、放置→菌根菌の減少→

表2 マツ林の環境とキノコ相

	若 齢 林	壮 齢 林	老 齢 林
林 相	下層植生、A層（※）とも貧弱である	下層植生が多くなりA層がやや発達している	高木の広葉樹が競合しA層が発達して土壌が肥沃化している
菌 根 菌	マツ特有種がほとんどである フユヤマタケ、キツネタケ、クロトマヤタケ、スナチアセタケ、ササタケ、オウギタケ、ヌメリイグチ、チチアワタケ、アマタケ、ハツタケ、トキイロラッパタケ、シヨウロ、コツブタケなど	マツ特有種、広葉樹との共通種が見られる キシメジ、シモコシ、シロシメジ、マツタケ、マツタケモドキ、マツシメジ、ホンシメジ、ムラサキナギナタタケ、ホウキタケ、クロハリタケ、チャハリタケ、クロカワなど	マツ特有種はほとんど見られず、広葉樹との共通種や広葉樹特有種が見られる テングタケ、タマゴタケ、ツルタケ、ガンタケ、キアブラシメジ、ヌメリササタケ、ドクベニタケ、チチタケ、ケシロハツモドキ、クロハツ、キチチタケ、カノシタ、ニンギョウタケなど
腐 生 菌	ほとんど見られない	落葉分解菌が見られる モリノカレバタケ属など	落葉分解菌が多く見られる モリノカレバタケ属、クヌギタケ属、ハラタケ属など

『石川県のキノコ』（1999）より

※ A層＝地表の落枝葉とその分解物の層を指す

よねやま きょういち

1936年生まれ。きのこの分類と分布、植生とのかかわりに興味をもち、きのこの会の中では山地帯、亜高山・高山帯の調査グループに属し、調査活動に加わっている。石川きのこ会副会長。

とが のりまさ

1955年金沢市生まれ。子どもの頃のきのこ狩り体験がキノコの世界を知るきっかけに。現在、石川きのこ会理事。白山高山帯の調査などを担当。

石川県のキノコ

— 自然環境とキノコ相 —

梅 典雅・米山競一

石川きのこ会

はじめに

いったい日本には、何種類のキノコが生育しているのだろうか。日本で最も多くのキノコが掲載されている図鑑は、保育社の『原色日本新菌類図鑑』であるが、その数は約千種類であり、実際はその数倍といわれている。菌類は、他の動植物に比べて、研究が遅れている生物群のひとつであるといえる。

それでは、石川県内のキノコの種類数はどうであろうか。県自然保護課の委託により石川きのこ会が実施した「自然環境保全計画調査（キノコ）」の報告書『石川県のキノコ』（一九九九）には、まだ正式な学名が付けられていないものも含め、標本に基づく千百五種類が記載されており、その後も新しい種類が次々と見つかったというのが現状である。石川県のキノコ相に関する調査研究は、充分とは言えないが、比較的進んでいるということはできよう。

このような中で、本県のキノコ相を概観

全国的にみてもキノコの調査研究が進んでいるといわれる石川県では、その多彩なキノコ相がすこしずつ明らかになってきています。

すれば、本県が日本の中央部に位置し、海岸から高山帯まで様々な環境を有することから、キノコも南北両系のものが混在するなど、多様性に富むことが特徴のひとつで

表1 植生帯別・生活型別キノコ確認種数

植生帯区分	生活型別種類数(%)			
	菌根菌	腐生菌	寄生菌	計
丘陵帯 (平地～里山)	371 (40.3)	512 (55.6)	38 (4.1)	921 (83.3)
山地帯 (ブナ・ミズナラ林)	187 (47.9)	193 (49.5)	10 (2.6)	390 (35.3)
亜高山帯～高山帯	83 (63.4)	48 (36.6)	0 (0)	131 (11.9)
計	449 (40.6)	610 (55.2)	46 (4.2)	1,105

*『石川県のキノコ』（1999）を改変



ショウゲンジ。アカマツ林に生える食菌であるが、本県では白山のハイマツ林で初めて採取され、その後、キタゴヨウ林でも見つかった

あると推測される。

表1は、本県を大まかに三つの植生帯に分け、前に述べた千百五種類を標本採取地の植生帯および生活型ごとに区分したものである。ただし、複数の植生帯で採取されたものもあるため、各々の合計数は一致しない。

以下、各植生帯別にキノコ相の特色や現況を述べてみよう。

◎中村元風 (なかむら・がんぷう、陶芸家・日本工芸会正会員)

舞台、古九谷のころを今に

北国新聞夕刊「舞台」から

p. 25のように掲載されたのですが、HPに入ってきた形でご紹介します。

本文： 伝統とは古いままを残すことではなく、創業当時の大切なところを残すことだと思っている。

九谷焼は三百五十年程前に創始された古九谷をルーツに持つ。私は十六年前に陶芸を志した時、古九谷作品を真剣に調べ始めた。美術館や古美術商に頼んで手に取らせてもらったことも数えきれない。しかし見て触るだけではよくわからなかった。マラソンも実際に走ってみないと本当のことがわからないように、古九谷も、実際に真似て造ってみないと本当のことがわからないのだと悟った。

幸運なことに、私のしつこさに負けたのか、ある大コレクターが、古九谷百点程を十年近く貸してくれた。

私は十年程、それを写す仕事に没頭した。実際に”本歌”を目の前にして写してみると、それまで見えていなかった様々なものが見えるようになってきた。古九谷を造った人々の意図も少しずつ見えてきた。

真っ白な白磁を求め、端正な形を求めていたことがはっきり見えてきた。当時の技術の限界の中で、もがき苦しみ、デザインを工夫して最善の作品に仕上げようとする執念がはっきり伝わってきた。

私は十年近くにおよぶ、この古九谷を写すという仕事を通じて、古九谷に始まる九谷焼の伝統とは、その時代の最新の技術を駆使して、その時代でなければできない、そして今までにない、よりよい作品を目指し造り続けることだと知った。

私が一生の中で、どんな作品を残すことができるのか、私の挑戦は始まったばかりである。

(加賀市)

北

国

平成12年(2000年)5月29日 (月曜日)

京・日本橋高島屋で開かれ、白磁に九谷の五彩を
使った絵付けを施した今
やかな作品を鑑賞した。

東京 だより

中村さんは現在、百名
山を題材とした作品を手
掛けている。今回の個展
では地元の白山をはじめ
め、羊蹄山、大雪山、丹沢
大山を描いた新作の大皿
四点が公開されたのをほ
じめ、白馬三山や妙高山、
磐梯山、蔵王山、鳥海山
などの小皿も展示され、
来場者はじっくりと色鮮

◇加賀市大聖寺錦町の陶芸家、中村元風さんの「今九谷色絵磁器展」
「写真」がこのほど、東
九谷の力作約八十点が陶
器ファンのため息を誘っ
た。

「今九谷」力作80点並ぶ 加賀の中村さんが個展

